

父を葬る

作・石原 燃

登場人物

大野知花子（おおのちかこ・娘・三八歳）

高萩浩三（たかはぎこうぞう・父・六三歳）

太郎（たろう・五三歳）

四畳半の和室。

下手に押入れ。

上手に腰窓。淡い色のカーテンが掛かっている。

中央にちゃぶ台。

ちゃぶ台の上に請求書や広告チラシの山。

その麓に、灰皿とライター。

灰皿にはチラシの燃えかすと半分ほど焼け残った請求書の封筒。

ちゃぶ台の下手横にゴミ箱。

その隣、押入れの手前に布団が敷かれている。

布団の上に女物の洋服が脱ぎ散らかされていて、掛け布団は山の様に盛り上がって見える。

和室の奥に狭い台所。小さい冷蔵庫。

第一場 水曜日の朝

秋の朝。外が白んでくる。

台所から焼酎の瓶とグラスを手に浩三が入ってくる。

ちゃぶ台の上の物を寄せて、焼酎とグラスを置く。

腰を下ろすと、焼酎をグラスに注ぐ。

美味そうに一口飲む。

灰皿からこぼれた灰を指で集めて灰皿に戻す。

灰で汚れた指をチラシになすりつける。

指が綺麗になったことを確認し、焼酎をもう一口飲む。

布団の山が動き、知花子が出てくる。

浩三と目が合う。

浩三 おはよう。

知花子 ……。

浩三 ん？

知花子 （焼酎を見た） ……。

浩三 俺に供えたんだろ。

知花子、灰皿に視線を移すと、跳ね起きる。

灰皿を手に取り、燃えかすをゴミ箱に捨てる。

空になった灰皿をちゃぶ台の下に置く。

もう一方の手でライターを取り、灰皿の上に置く。

浩三 なんだよ。

知花子、洋服を拾い集め、胸に抱く。

知花子 泣いてたじゃない。

浩三 は？

知花子 泣いてたでしょ、昨日。

浩三 泣いてねえ。

知花子 立派に供養してもらって、もう思い残すことはないって。

浩三 卑怯だぞ、ママの連中まで呼びやがって。

知花子 嫌だったの？

浩三 そういわけじゃねえけどよ。

知花子 日にち決まったら連絡くれて、根元さんが言うから。

浩三 あいつ公務員だろうが。そんなボランティアみたいなことやってるから福祉センターが回らなくなるんだ。

知花子 もう一回やってみる。

浩三 何言ってるんだ。

知花子 もう一回やれば、今度こそ。

浩三 納骨のやり直しなんてみっともない真似出来るか。

知花子 だけど、おとといは納骨したらお別れだと言ってたじゃない。だから一緒に飲んだのに。

浩三 そうでも言わねえといつまで経っても口きいてくれねえからよ。

知花子 なにそれ、嘘だったの？

浩三、焼酎を注ぎ、飲む。

知花子 もしかして共同墓地じゃ嫌だったこと？

浩三 何言ってるんだ、お前。

浩三 は？

知花子 お寺から連絡来た日だもんね、現れたの。そこには入りたくねえって、そういうこと？

知花子 そりゃ嫌だよ、共同墓地なんて。だけど高萩家は途絶えちゃってるし、母さんと一緒にあつちの家に入れてもらおうわけにもいかないし。

浩三 いや、だから。

知花子 私だっどどこに入ったらいいかわかんないんだよ。私が死んだら管理する人もいなくなっちゃうし。

浩三 誰も文句なんか言ってるねえだろう。

知花子 だけど写真も位牌も用意できなかったし。

浩三 だからしょうがねえって言ってるじゃねえか。二十五年ぶりに電話もらって、いきなり遺骨引取れて言われたんだろ。

知花子 そりゃそうだけど。

浩三 キムの親父が言ってたろ。

知花子 ああ。

浩三 最近はや暮らしの殆どが生活保護だからな、大抵は家族が見つかる。でも、そのほとんどが受け取り拒否だっど。

知花子 確かにそう言ってたけど。

浩三 ドヤのオーナーが言ってるんだから間違いない。俺は娘に受け取ってもらえたんだ。それだけで幸せでもんだろ。

知花子 でも……。

浩三 花も沢山供えてくれてよう、立派な墓だったじゃねえか。

知花子 秋明菊、安かったから。

浩三 なんだ。摘んできたんじゃねえのか。

知花子 もっと高いの買ってくる。

浩三 いいよあのままで、もったいいえ。何にも不満はねえんだ。な。これ以上何もすることあねえ。

知花子 そんなこと言ったって。

浩三 なんだよ。

知花子 ……それじゃ、成仏できないじゃない。

浩三 ……。

知花子 そういうことでしょ、これ。

浩三 ……アブレ。

知花子 え？

浩三 日雇いが仕事にありつけなかったらアブレだ。後は一日酒でも飲んでじっとしてるしかねえ。

この様子じゃあの世もだいぶ不況だね。

知花子 なによ、それ……。

浩三、焼酎をつぎ、飲む。

知花子、奥の部屋に洋服を置きに行く。

浩三 二万人も死んだんだ。あの世も人があぶれてんのよ。

知花子、和室に戻ってくる。

カーテンを開けると朝日が部屋に差し込む。

布団を急いでたたむ。

浩三 水曜休みじゃねえのか。

知花子 昨日午前中で帰らせてもらったから。

浩三 ああ、俺のせいか。

知花子 今週は人少ないの。学生さんテストだから。

知花子、押入れから着替えを引っ張り出す。

知花子 (手を止めて) 上野駅行ってみる？ 成仏できるかもよ。

浩三 なんでだよ。

知花子 おととい飲んだ時、懐かしそうにしゃべってたから。

浩三 上京した時のことでも話したか？

知花子 そうじゃなくて東北新幹線が開通した時のこと。まだ五年生の私連れて夜中に駅に忍び込んでん
だんですよ。

浩三 ああ、その話な。

知花子 駅員に見つかってめちやくちや怒られたって。

浩三 あの駅員、豆みてえな顔してポリ公まで呼びやがってよ。

知花子 逆ギレするからだよ。誰がこの線路作ったと思ってるんだなんて。

浩三 まるでてめえの物みたいに説教しやがるからよ。

知花子 だからって掴みかからなくても。

浩三 ちよっと意見してやっただけじゃねえか。

知花子 ……そのままそっちが生まれた町まで行ってもいいけど。

浩三 あんなどころにや行きたくねえ。

知花子 どうして。私も一度しか行っただことないし。会いたい人いないの？

浩三 うるせえなあ、余計なこと考えやがって。

浩三、立ち上がり、台所へ行く。

知花子、持っていた着替えを置く。

奥の様子を伺いながら、押入れを開ける。

押入れからビニール袋を取り出す。

灰皿とライターを手に取り、袋に入れ、口を縛る。

袋を押入れの奥に押し込む。

浩三（台所から）会いたいやつなんかいるわけがねえ。知ってるだろ。人の目があるから帰ってくるなって金渡されてよ、それっきりだ。どいつもこいつも噂になるのが怖くて怖くてしょうがねえのよ。なんせ隣の嫁が何時に起きたかまで噂になるようなとこだ。ろくなもんじゃねえよ。

浩三、梅干しの箱を持って出てくる。

知花子、慌てて押入れを閉める。

浩三 どうした？

知花子 ううん、なんでもない。

浩三（梅干しを差し出し）これ食ってけ。

知花子 なに、梅干し？

浩三 流しの下に入ってた。汗かくと塩分が足りなくなるからな。

知花子 朝ご飯はいらないうって言ったじゃない。

知花子、着替えを拾おうとする。

浩三、それを遮るように梅干しの箱を知花子に渡す。

知花子 なによ。

浩三 若けえのが現場に来るとよ、塩分とらずに日射病になるのが必ずいんのよ。高速の梁の下は蒸すしな、飛び跳ねたセメントこすり落とすと夢中になって、気が付く頃にはもうふらふらだよ。

知花子、仕方なく梅干しをひとつ口に入れ、浩三に箱を差し出す。

浩三 俺はもう食わねえって言ってんだろ。

知花子 でも、焼酎。

浩三 こんだけ喋ってるんだ。喉くらい潤したって罰は当たらねえ。

知花子 どういう理屈よ。

知花子、着替えを持って奥へ行く。

浩三 駅前によ、トキワ屋っていう漬物屋があったろ。覚えてねえか。お前まだガキだったからな。あその梅干しはよ、紀州のなんか目じゃねえって評判だよ。ガキの頃は懂れたもんよ。前に太郎の奴と同じ飯場に入った時によ、あいつもあの辺の出だっというもんだからよ、一度でいいからあの梅干しでめし食ってみてえよなって言ったのよ、そしたら太郎の奴、なんだ食ったことねえのか

って馬鹿にしやがってよう。

知花子、戻って来る。着替えはまだ終わっていない。

知花子（押入れを探りながら）太郎さん、納骨来たらよかったのね。

浩三 あいつは入院してやがるんだ。

知花子 根元さんから聞いた。咳が酷かったって。

押入れから目当ての洋服を取り、再び奥へ。

浩三 あいつは炭鉱の出だからな。なんかかっていうと本当は親父の後を継いで先山になるはずだったって、酔って絡んでまわってよう。うざってえもんだから、しょっちゅう仲間にいびられてよ。金取られちゃ、血だらけになってやがる。……しようがねえアル中野郎だけど、俺とはいつもあの町の悪口で盛り上がってよう。あいつ、その度に言うのよ。あの町は最低だ。だけどトキワ屋の梅干しは絶品だ。浩ちゃんにもいつか食わしてやるってな。

知花子、化粧道具を手に戻ってくる。

知花子 それ買ってこようか。

浩三 え？

知花子 その梅干し。ネットで買えるかな。

浩三 買えやしねえよ。どうせ地元の梅は使えねえし。

知花子 駄目元で聞いてみたらいいじゃない。震災前の商品だってあるかもしれないし。太郎さん、どこの病院にいるの？

浩三 そんなこと知るわけねえだろ。

知花子 じゃ名前は？ 名字。

浩三 知らねえよ、名前なんか。太郎だって本名だかわかりやしねえ。

知花子 なにそれ。友達だったんでしょ？

浩三 だからもういいって。どうせ食えねえんだし。

知花子 でも心で味わうっていうか。

浩三 うるせえなあ、酒がまずくならあ。

知花子 じゃあ、どぶろくは？

浩三 は？

知花子 お酒なら飲めるんでしょ。

浩三 そういふ問題じゃねえんだよ。

知花子 おとといもどぶろく、どぶろく言ってたし。

浩三 おふくろのどぶろくが飲めるんならな。

知花子 おばあちゃんには敵わないかもしれないけど、最近どぶろくブームだし、いいのがあるよ、きっと。

浩三 なんでも買えると思いやがって。これだから東京生まれは。

知花子 だって買うしかないじゃない。他にどうすんのよ。

浩三 酒なんてもんはな、どこの家でも当たり前で作ってるもんだったんだ。昔は酒飲むのに金なんかかからなかった。

知花子 そんなこと言われても。

浩三 それなのにお上は、ある日突然、これからは家で酒を造ったら密造酒だってぬかしやがった。酒は金だして買えだ？ 税金のため？ 冗談じゃねえ。五百円もする酒どうやって買えっていうん

だ。

知花子 ……どうしてそういう話になるのよ。

知花子、奥へ戻る。

浩三 役人が来るとよ、俺がおとりになって山に逃げるのよ。その間におやじが本物の瓶を隠してよ。役人は山で道に迷ってべそかいてやがった。ざまあみろだ。農民を舐めるからいけねえのよ。……ちくしょう。おやじがパクられさえしなけりやな。帰ってきた親父はえらく暴れてよ。以来ばったり働かなくなっちまった。田んぼがなくて酒が造れねえ連中が密告したんじゃねえかって、お袋は言ってたよ。

知花子の携帯電話が鳴る。

知花子、和室に戻ってきて電話に出る。

知花子 はい、……もしもし。

知花子、電話を切る。

浩三 誰だ？

知花子 無言電話。

浩三 番号は。

知花子 (表示を見て) 公衆電話。

知花子、鞆を手に取り、中身を確認する。

ハンカチとティッシュを詰め込む。

ちやぶ台の上にあるはずの書類を探す。

浩三 次は俺が出る。

知花子 他の人に声聞こえないでしょ。

浩三 無言かどうかはわかる。

知花子 意味あるの、それ。

浩三 お前が不快な思いをしなくて済む。

知花子 ねえ、ここに置いてあった書類知らない？

浩三 話変えるんじゃねえ。

知花子 これくらい(A4)の大きさの白い紙なんだけど。

知花子、先ほど浩三が汚れをなすりつけた紙を手に取る。

探していた書類である。

書類は浩三がなすりつけた灰で黒く汚れている。

知花子 あーあ。

浩三 お前が机の上汚すからいけねえんじゃねえか。

知花子 は？

浩三 ごめんなさい。

知花子、書類をゴミ箱に捨てる。

浩三 捨てるこたあねえだろ。(と、資料を取り、手で皺を伸ばす。)

知花子 印刷しなおすから。

浩三 (書類を見て) なんだこれ。

知花子 マニュアル。

浩三 なんだそれ

知花子 頼まれたから、店長に。

浩三 お前、家でも仕事してんのか。

知花子 そうだけど？

浩三 残業代は。

知花子 もらえるわけないでしょ。ただのパートなんだから。

浩三 そんなもん社員がやりやいいじゃねえか。

知花子 実際にレジ打ってる人が作った方がいいからって。

浩三 そういう問題じゃねえだろ。

知花子 わかっているけど、頼まれたら断れないよ。

浩三 断ったらクビにでもされんのか。

知花子 断らなくてもされるかも。

浩三 どうして。

知花子 猿でもわかるマニュアル作れって。

浩三 は？

知花子 人間はいらないんだよ。

浩三 ……。

知花子 洪水あったでしょ、震災の後にタイで。あれでタイから労働者が入ってきたじゃない。だから人が押し出されてスーパーも倍率が上がってるんだって。仕事きつくて辞める人が続出しても、本

社は全然困らないって。

浩三 そうは言ってもよ。

知花子 そっちみたいに自由じゃいられないの。

浩三 俺は生活保護だったんだぞ。保護受ける区から勝手に引越せねえし、家賃も決まってる。

住むとこひとつ自由に決められねえ。

知花子 そういうこと言ってるんじゃない。

浩三 わかっているよ。精神的なことを言ってるんだよな。

知花子 ……。

浩三 つまり、お前は自由じゃねえと。店でも自分押し殺して、がんじがらめになってるってことだよな。

知花子 ……仕事ってそういうもんじゃない。

浩三 だがそれがそう決めたんだ。

知花子 嫌なことの一つや二つあるでしょう、子供じゃないんだから。それを我慢するのが社会人なんじゃないの？

浩三 昔よ、お前の友達とかいうガキが二、三人うちに来たことあったろ。お前はせっせと菓子出してたり茶入れたりしててよ、俺に紹介するわけでもねえ。そのうちガキの一人がお前の服がださい

って言い始めた。お前は文句を言うでもなく、何度も着替えちゃそのガキの前に立ってよ、言われ

るがままに回って見せたりしてやがる。

知花子 ただ遊んでただけ。

浩三 へらへら媚びた笑いしやがって、なにが遊んでただ。

知花子 あれくらのことで目くじら立ててたら笑われるよ。軽く流していかなくちや。みんな冗談

でやってんだから。

浩三 それでお前は楽しかったのか？
知花子 楽しいとか楽しくないとかそういう問題じゃないんだって。クラスになじむにはああするしかなかったの。

浩三 だけどお前は結局、仲間はずれにされたじゃねえか。

知花子 ……。

浩三 本当は変えてえと思ってんだろ。

知花子 ……。

浩三 夜中に一人で紙燃やしたって、何も変らねえんじゃねえのか。

間。

知花子 もう行かないと。

知花子、鞆を持ち、立ち上がる。

知花子 お店クビになりたくないの。工場行くよりはずっと楽し、この年でキャリアのない人間雇ってくれるところ、そうそうないから。

浩三 ……そうか。

浩三、焼酎をグラスに足し、飲み始める。

知花子、出て行きかけて足を止める。

知花子 父さん。

浩三 ん？

知花子 お寺が決まったって連絡した時にね、根元さんが言ってたんだけど。

浩三 なんだよ。

知花子 ドヤの部屋にいたんじゃないかね。

浩三 ……。

知花子 外で倒れてたの、キムさん達が部屋まで運んだって。酔っ払ってるだけだと思ったけど、ちよっと様子がおかしかったって。

浩三 うるせえな。もう時間なんだろ。さっさと行きやがれ。

知花子 仏壇くらい買おうか、小さいのだったらそんなに高くないし。

浩三 いらねえよ、そんなもん。

知花子 ……行ってくる。帰り、遅くなるから。

知花子、部屋を出て行く。

浩三、焼酎を飲み続ける。

暗転。

第二場 金曜日の夜

二日後の夜。

浩三が仏壇のカタログを見ながら焼酎を飲んでいる。側にはカタログが数冊置かれている。

浩三、ページをめくりながら、常磐炭坑節」を口ずさむ。

浩三 朝も早よからカンテラ下げて
坑内通いも 主のため
遠くはなれて遭いたい時は
月が鏡に なればよい
おらが炭鉱で見せたいものは
男純情と 良い女
遭えばさほどの話もないが
遭わなきやその日が 過ぎされぬ
おらが炭鉱に一度はござれ
義理と人情の 花が咲く

そこに知花子が帰ってくる。疲れた様子。

浩三、帰って来たことに気が付かず歌っている。

知花子、わざと音を立てて荷物や床に置く。

浩三 おかえり。

知花子 ……。

浩三 遅かったな。

知花子 遅番の子がなかなか来なくて。

浩三 そうか。

浩三、再びカタログを見始める。

が、苛ついた様子の知花子に気が付く。

浩三 なんかつたのか？

知花子 別に。

浩三 無言電話でも掛かってきたのか。

知花子 着信拒否したから。

浩三 なら良かった。

知花子 ……。

浩三 なんだよ。

知花子 くつろぎすぎじゃない？

浩三 は？ そうか？

知花子 歌なんか歌っちゃって。

浩三 ドヤじゃ部屋の仕事がベニヤ一枚だったからよ、鼻かむだけで怒鳴られてたなと思ったら、
つい楽しくなっちゃって。

知花子 浮かれてるよね、みんな。

浩三 誰だよ、みんなって。

知花子 遅番の子、なんで遅刻したと思う？

浩三 さあ。

知花子 デモに行ったらすごい人でなかなか電車に乗れなかったんだって。嬉しそうに すごい人で
した。」って。

鞆の中で携帯電話が鳴る。

知花子、電話に出る。

知花子 お疲れ様です。……はい、大丈夫です。……え？ だってそんな急に。……いえ、何も聞いてません。……私は別に何も。……え、明日ですか？ でも私遅番も入ってて、今日も残業だったし。……でも……はい。……はい、わかりました。……はい。

電話を切る。

浩三 どうかしたか？

知花子 ……。

浩三 しかしカタログつつうのは、あっちゅう間に届くな。

知花子 ……。

浩三 な。

知花子 え、ああ。

浩三 昨日電話して今日届くってよう。どんだけ労働者こき使ってた。

知花子 気に入ったのあったの？

浩三 あるわきゃねえだろ。いらねえよ、仏壇なんて。

知花子、ジャージの上に携帯を投げ出す。

浩三、立ち上がる。

浩三 なんか食うか、腹へってんだろ。

知花子 食べてきたから。

浩三 そんなこと言わずに一杯やろうぜ。つまみ作ったのよ、お前が疲れて帰って来ると思ってよ。

浩三、台所へ行く。

知花子、押入れを開け、ライターの入った袋を探す。

浩三（台所から）人参があったからよ、イカ人参作ったのよ。スルメと昆布をこう細切りにして、人参と合わせてよ、酒と醤油と砂糖で漬けて込んで。お前好きだったろ。もう漬かっている頃だから。（冷蔵庫をあけた）……あれ、……おい、これ冷えてねえぞ。

知花子、袋からライターを出す。

浩三（台所から）おい、聞いているか。

知花子 ……え？

浩三（台所から）冷蔵庫壊れてるって。

知花子 ああ。

浩三（台所から）リサイクルの店に電話してみるか。ヤマの仲間が三ノ輪で店始めてよ。

知花子、押入れを開め、ライターをポケットにしまう。

浩三、小鉢にイカ人参をいれて、持って来る。

浩三 納骨の時に頭にバンダナ巻いた親父が来てたろ。あいつ活動家でよ、仕事のねえ若けえの集めて、俺たちが集めてきた廃品直して売ってんだよ。大したもんだろ。このくらい持って行けばちよちよっと直してくれるぞ。

浩三、ちやぶ台に小鉢を置いて、箸を揃えて置く。

知花子 なにそれ。

浩三 イカ人参だっつってんだろ。覚えてるか？ 盲腸の時のこと。イカ人参山盛り食った次の日に腹が痛えっつって早引けしてきてよ、イカ人参の食い過ぎだっつって笑ってたら、そのうちのうち回り始めてよ。

知花子 出掛けてくる。

浩三 話の途中だろうが。

知花子 なに？

浩三 え？

知花子 用件。

浩三 用件って、だから冷蔵庫が。

知花子 新しいの買うから。

浩三 だからもったいねえっつってんだろうが。

知花子 買った方が安いよ。

浩三 あのなあ、冷蔵庫がもったいねえんじやねえんだよ、あれを作った労働者の労働がもったいねえのよ。

知花子 ……。

浩三 しんどいぞ、工場のベルトコンベアは。

知花子 知ってる。

浩三 そうだろ、作業に慣れてきたらどんどん速度上げられてよ。まるでロボットだ。ちょっと間違えりゃ罵倒されるわ、名前は覚えちゃもらえねえわ。

知花子 そういう苦労を考えろって言いたいの？

浩三 考えろっていうんじやなくてよ、想像してみるっていうかな。

知花子 我慢が足りないだけじゃない。

浩三 は？

知花子 うちのスーパーもそんなのばかり。レジが遅いって怒られたとか、商品にケチつけてくる客がいるとか、マイバッグに袋詰めするの面倒くさいとか、くだらない文句ばかり言ってる。

浩三 いいじやねえか、文句くらい言ったって。

知花子 出掛けてくる。

浩三 なに苛ついてんだよ。

知花子 別に。ちょっと散歩するだけ。

浩三 こんな時間に若い女が一人でふらふらするもんじやねえ。

知花子 若くないし。

浩三 どこ行くんだよ。

知花子 ファミレスでもコンビニでも、どこでも。

浩三 友達でもいるのか。

知花子 いるわけないでしょ。

浩三 折角作ったんじやねえか、お前に食べてもらおうと思って。

知花子 自分で食べれば。

浩三 だから俺は食べられねえって言ってんだろ。

知花子 出掛けてくる。

知花子、鞆から財布と携帯を出す。

浩三、和室の出入り口を塞ぐ形で立つ。

知花子 なにしてんの、どいてよ。

浩三 いや、どかねえ。

知花子 なんですよ。

浩三 一緒に飲もう、な。

知花子 私には散歩する自由もないの？

浩三 いいじゃねえか、朝まで語り明かそう。

知花子 じゃあ、出て行って。

浩三 は？

知花子 私に出て行くなっていうなら、父さんが出て行ってよ。

浩三 だから、一緒に飲もうって言ってんじゃねえか。

知花子 一人になりたいの。察してよ。

浩三 ……。

知花子 人と暮らす才能ないんだよ、私。結婚生活も上手くいかなかったし、母さんの家庭にもなじめなかったし。高校卒業してからずっと一人だったから。疲れるんだよ、人がいると。

浩三 そんな気にしなくても。

知花子 気にするよ、そんな大きな身体で目の前うろろうろされたら。

浩三 悪かったよ。

知花子 母さんは出てこなかったよ。そりゃ癌だって言われてから時間あったから、心残りとかあったのかもしれないけど。

浩三 お前が受け取ってくれたから…。

知花子 出てくるってわかってたら受け取らなかった。

浩三 だから、それは…。

知花子 いつまでここに居るつもり？

浩三 ……。

知花子 昨日から見てるけど酒飲んでごろごろしてるだけじゃない。なんか思い残すことでもあるんだ。だったらさっさと行ってよ。仏壇だって遠慮してるのかもしれないけど、はっきりいって、仏壇ひとつで一人になれるなら安いもんだよ。ねえ、何が望みななの、言ってよ。ねえ。

浩三 ……。

知花子 どいて。

浩三 ……どかねえ。

知花子 なんです！

浩三 ポケットのもん、どうするんだ。

間

知花子 何も、持っていない。

浩三 それ俺によこせ。

知花子 煙草吸うの。

浩三 キムの親父の煙草嫌がってたじゃねえか。

知花子 店の落とし物だから。

浩三 そんなのもう取りに来ねえよ。

知花子 でも、ちゃんと管理しないと…。

浩三 知花子。(と、手を出す。)

知花子、ポケットからライターを出す。

浩三、知花子の手からライターを奪い取る。
浩三、ライターを点す。

知花子 あ……。

浩三 ……。

知花子 消してよ。

浩三 （炎を知花子に向け）ほら、ちゃんと見てみる。

知花子 消してってば。

浩三 炎見て心が躍るか、煙に包まれて安らぐか。

知花子 なにもしてないって言ってるじゃない。私はなにも。

浩三 慌てふためく奴ら見てざまあみろって思うのか？ 死んじまえて、消えてなくなれって思うのか？ え？

知花子 知らない。知らないってば、私は……。

浩三 ごまかさねえでどう見えてるのか言ってみる。俺が聞いてやるから。

知花子 やめてよ！

知花子、ライターをはたき落とす。

ライターの火が消えて、転がる。

沈黙が流れる。

浩三 さっきの電話、店長からだろ。

知花子 ……。

浩三 何があったんだよ。

知花子 ……またパートが辞めたって。先月入った子。

浩三 それで。

知花子 代わりにシフト入れって。

浩三 お前が？

知花子 私の責任だから。

浩三 どうして。

知花子 私について行けないって。

浩三 そういつて辞めたのか？

知花子 この間まで桜井って子が教えてたの、その子のこと。桜井が辞めて、引き継いだから。言うことが違うって。

浩三 そうだとしてもよ、お前が責任を取らされるのはおかしいだろ。

知花子 しょうがないでしょ。共同責任なんだから。罰金なかっただけまし。

浩三 ちょっと待て、なんだ罰金って。

知花子 無断欠勤とか遅刻とかしたら、教育係も共同責任で罰金なの。

浩三 それはおかしいだろ、さすがに。

知花子 だけど無断欠勤減ったんだって、そのルールにしてから。人に罰金払わせたらいられないもんね。よく考えられてるわ。

浩三 なに感心してんだ。文句ぐれえ言ってやりやいいじゃねえか。

知花子 誰に？ 店長に？

浩三 本社にだよ、当たり前えだろ。

知花子 簡単に言わないでよ。そんなことしたらクビだよ。

浩三 冗談じゃねえ、なんでそんな簡単にクビ切られなきゃいけないんだ。

知花子 しょうがないでしょ。パートなんだから。

浩三 パートだろうがなんだろうが、人権ってもんがあるだろうが。

知花子 人権？

浩三 ああ、人権だ。

知花子 高卒の独身女に人権なんてないよ。

浩三、焼酎をちゃぶ台に置く。

知花子に対峙して座る。

浩三 いいか、よく聞け。俺はヤマの、いや山谷の日雇いだった。

知花子 知ってるって。

浩三 俺たちは昔っから迫害されてきた。いわば最下層だ。手配師どもにピンハネされて、現場に行きや人が嫌がる仕事押しつけられてよ。行ってみたら条件が違うなんてことはしょっちゅうだ。仕事を終えてヤマに帰ればメシは高くてまずいしよ。ちよっと一杯ひっかけただけでオケラになっちゃう。

知花子 一緒にしないでよ、そういうのと違うから。

浩三 でもよう、俺は労働者であることを誇りに思ってる。なぜかわかるか。日本の産業を支えてるのは俺たちだからだ。会社で高い給料もらってる連中じゃねえ。その証拠に見てみる。高速を作ったのも、新幹線のためにトンネル掘ったのも、全部俺たちじゃねえか。俺たちは身体張って日本の産業を土台から支えてきたんだ。いいか、会社なんてもんはな、俺たち労働者にくらいついた寄生虫に過ぎねえんだ。

知花子 わかったから、もういいでしょ。

浩三 わかってねえ。お前は何もわかつちゃいねえ。わかってたらなんで声をあげねえんだ。それはおかしいって、なんで言わねえんだ。

知花子 だって。

浩三 だってなんだ。おかしいと思わねえのか。

知花子 思うよ。思うけど。どうしようもないじゃない。

浩三 そんなことねえ、いくらだって聞える。

知花子 どうやって。

浩三 俺たちも闘った。黙って野垂れ死ぬな、生きて奴らに仕返ししようって、スローガン掲げてよ。知花子 だから。

浩三 蒸し暑い夜だった。どうにも身体がべたついて眠れねえ。涙橋まで出てみたら人が集まり始めた。こういう夜は暴動が起きる。あの頃は争議団とヤー公の抗争が続いててよ。やられちややりかえすような毎日でぴりぴりしてた。ポリ公はヤー公じゃなくて俺たちをパクリやがるしよ、どっかで暴れてやらねえと気が収まらねえと誰もが思ってた。ガラスが割れる音がして、見たら何人かの男が通り沿いの店を襲ってた。俺たちを邪険にした店に報復したんだ。気が付いたら何千人、いや一万人もの労働者が涙橋に集まった。

知花子 だから、そんなの昔の話でしょ。

浩三 いいから、聞け。俺はマンモス交番に行って罵声浴びせてる野郎共の後ろから石を投げてやった。警察の機動隊が俺たちを包囲してた。いざとなったらドヤに帰って寝るだけだ。機動隊は怖くねえ。だけど、それだけじゃなかった。私服が何人も俺たちに紛れてやがったんだ。石投げるとその場で逮捕だ。あっという間に何十人も逮捕された。そこに放水車だ。奴ら俺たちに向けて水をぶっぱなしやがった。もう潮時だ。そこら中で仲間同士の小競り合いが始まった。その時だ。ずっと後ろの方から声が飛んで来た。暗闇の中に光を投げ込むみてえな声だった。歌だ。常磐炭坑節だ。誰かが歌ってるんだ。一人、いや二、三人いるかもしれねえ。殴り合ってた連中も動きを止めて歌を聴いてた。どっからともなく手拍子が起こって、歌う奴はどんどん増えていった。俺も歌った。歌いながら踊った。上半身裸になって放水車の水浴びながら踊った。身体から湯気出して一万人が

踊ってた。

間。

知花子 ……苦しい。

浩三 え？

知花子 私、まだ何かに期待してる。

浩三 ……。

知花子 どいて。

浩三 ……。

知花子、財布と携帯を持って出ていく。

浩三、座り、焼酎をグラスにつぐ。

浩三 嘘じゃねえ。一万人の労働者が踊ったんだ。

暗転

第三場 日曜日の夜

二日後の深夜。

外は雨が降っている。

暗闇の中、浩三が冷蔵庫を修理している。

冷蔵庫に頭を突っ込んだり、裏側を覗いたり。

知花子が帰ってくる。

濡れた傘を持ち、呼吸が乱れている。

玄関に入ると、急いで扉に鍵を掛ける。

傘を立てかけ、室内に入る。

台所で小さくなっていた浩三には気が付かない。

知花子、鞆を床に下ろすと、カーテンを閉める。

カーテンの隙間から外の様子を伺う。

背後から浩三が声をかける。

浩三 おい。

知花子 ！（驚く）

浩三 なんだよ。

知花子 ……。

浩三、和室の電気をつける。

浩三 冷蔵庫なあ、電源抜いてみたらいいんじゃないかな。

知花子 （カーテンの隙間から外の様子を伺う）

浩三 前に聞いたんだけどよ、冷凍庫から冷気が回るダクトが氷で埋まっちゃうとこういう風に冷えなくなるんだと。一旦電源抜いて、氷溶かしてやったら直るんじゃないかな。

知花子 （外の様子を伺っている。）

浩三 今度、水が溶け出しても良いとこまで運んでよ……。
知花子 (動かない。)

浩三 おい、まだ怒ってんのか。ちよっと熱くなっただけじゃねえか、お前がいじめられてるって言うからよ。もう二日だぞ。なあ、口きいてくれよ。

知花子 しっ。

浩三 え？

知花子 ……男が。

浩三 は？

知花子 外。

浩三、外の様子を見る。

浩三 誰もいねえよ。

知花子 いる。

浩三 気のせいじゃねえのか？

知花子 違う。

浩三 どんな奴だった？ 背格好とか、歩き方とか。

知花子 ……足引きずってた。

浩三 足？

知花子 多分。

浩三 ……。

知花子 なに？

浩三 いや。

知花子 ……警察だよ。

浩三 え？

知花子 尾行。

浩三 お前、やっちまったのか。

知花子 ……。

浩三 どこで。

知花子 店の裏で。でも、すぐ消した。

浩三 ……。

知花子 段ボール捨ててあったから。

浩三 見られたのか？

知花子 わかんない。

浩三 ……違う、ポリ公じゃねえ。

知花子 え？

浩三 お前をつけてきたのは全然違う野郎だ。

知花子 誰？ 警察じゃなかったら。

浩三 誰でもいいじゃねえか。

知花子 いいわけないじゃない。わかってるなら教えてよ。

浩三 ……。

知花子 言えないの？

浩三 言えないわけじゃねえ。でも。

知花子 中途半端な気休め言わないでよ。

知花子、押入れを開けて、ライターと灰皿が入った袋を探す。

袋を取り出す。

知花子、座り、ちゃぶ台の上で、袋を逆さにする。

灰皿とライターが音を立てて出てくる。

浩三 太郎だ。

知花子 え？

浩三 太郎じゃねえかと思う。

知花子 そんなわけないでしょ。つけてきたんだよ、駅からずっと。

浩三 ……気軽に声かけられるような奴じゃねえんだよ。

知花子 だって入院してるって。

浩三 いっ抜け出したっておかしくねえ。一週間持ちや良い方だ。

知花子 そんなことしたら病院が探すでしょ。

浩三 病院は退院扱いにするだけよ。ヤマの患者なんて本心じゃ看たくねえからな。金はねえし、言うことは聞かぬえし。

知花子 だからって、やっぱあり得ないよ。

浩三 青いキャップ被ってなかったか？

知花子 ……。

浩三 たぶん、そうだ。

知花子 何しに来たの？

浩三 あいっと飲んでたんだ。あの日、倒れる直前まで。

知花子 太郎さん、なにか知ってるの？

浩三 いや、そういうんじゃない、あいつもその日にぶっ倒れちゃったから、俺がどうなったのか、知らなかったと思うんだ。だから。

知花子 死んだって知って？

浩三 たぶん病院で。根元のやつが見舞いに行ったのかもしれない。

知花子 いや、やっぱりおかしいよ。それだったら電話くらいしてくるでしょ。

浩三 だから、無言電話。

知花子 は？

浩三 あれ、あいつじゃねえかと思うんだ。

知花子 電話掛かってきた時、そんなこと一言も言わなかったじゃない。

浩三 わからぬえけど。

知花子 じゃあ、なんで今まで黙ってたの？

浩三 怖がると思ったからよ。

知花子 なにそれ？ 誰だかわかんない方が怖いに決まってるじゃない。

浩三 そりやそうかもしれないねえけど。

知花子 おかしいでしょ。なんでそんな嘘ばかり言うの？

浩三 嘘じゃねえって。

知花子 馬鹿にしないでよ。

知花子、ちゃぶ台の上にあったチラシに言葉を書き殴る。

馬鹿にして、馬鹿にして」などの言葉。

浩三、チラシを取り上げる。

知花子 なにすんの？

知花子、別のチラシに言葉を書き殴る。

浩三、再びチラシを取り上げる。

知花子 なにすんの、やめてよ。

浩三 やめねえ。

知花子 ほっといてよ、どうせ逮捕されるんだから。

浩三 逮捕なんかされねえって。

知花子 馬鹿にして。わかってんだから。逮捕されると思ってるくせに。

浩三 思ってたねえよ。

知花子 思ってる。だから嘘つくんでしょ。私を哀れんで。馬鹿な娘を持つと親も大変だよね。

浩三 いいかげんにしやがれ。

知花子 ……。

浩三 なにがあったんだ？

知花子 別に。

浩三 何かあったから段ボール燃やしたんだろ？

知花子 ……。

浩三 なんで火なんかつけたんだ？ え？

知花子 レジが合わなくて。いくら計算し直しても。

浩三 怒られたのか。

知花子 犯人がこの中にいるって。

浩三 誰が？ 店長がか？

知花子 店長、私が犯人だと思ってる。

浩三 なんか言われたのか？

知花子 見ればわかる。私をチェックしてた。ポケットが膨らんでいないか。歩く時小銭の音がしないかって。

浩三 そんなわけねえだろ。店長の言うなりでやってきたのに。

知花子 誰かが告げ口したんだよ。

浩三 考えすぎじゃねえのか。

知花子 みんなそうやって消えていったの。

浩三 急にクビになったら、店の仲間だって黙ってねえだろう。

知花子 黙ってるよ。

浩三 え？

知花子 誰も悲しんだりしない。

浩三 そんなこたあねえだろ。

知花子 みんな猿だもん。

浩三 仲間をそんな風に言うもんじゃねえ。

知花子 今日、店行ったら制服なかった。

浩三 だれか間違えて持って帰ったんじゃないのか。

知花子 信じないの？

浩三 そうじゃねえ、そうじゃねえけどよ。

知花子 辞めさせたいんだよ、みんな。

浩三 店の連中に、なんか言われたのか。

間。

知花子 噂してるみたい。

浩三 なんて。

知花子 店長に迫ったって。

浩三 くだらねえ。

知花子 迫った。

浩三 え？

知花子 ……迫ったの、私。

浩三 それで……。

知花子 やってない、なにも。

浩三 惚れてたのか？

知花子 わかんない。

浩三 ……。

知花子 去年、社員に推薦してくれるって言ったの。

知花子、チラシを黒く塗りつぶし始める。

浩三 誰かに相談したことあるのか。

知花子 相談？ 誰に。

浩三 誰でもよ、会社のやつじゃなくても、友達とか。

知花子 友達なんているわけじゃないじゃない。

浩三 どうして。

知花子 遊ぶ時間なんてなかった。病院の面会時間が終わってから、終電まで働いて。友達なんか出
来るわけない。

浩三 昔の友達がいるだろうが。

知花子 昔の友達になんか会いたくない。

浩三 どうして。

知花子 ……今なにしているのって聞かれるから。

浩三 何言ってるんだ。恥ずかしがることあねえ。お前は立派に働いてるじゃねえか。レジ係のチーフ
だろ。後輩にも仕事教えて。上げえじゃねえか。

知花子 どこが？ どこがすごいの？

浩三 ちゃんと働き続けている。

知花子 馬鹿にしないでよ。そのくらい誰だってやってるでしょ。

浩三 働いてねえやつは五万といるだろうが。

知花子 やめてよ。全然すごくない。私なんか全然。

知花子、ライターを手に取り、火をつける。

浩三 やめる。

知花子、塗りつぶした紙に火をつける。
炎が上がる。

浩三、慌てて火を消す。

燃えかすを集め、ゴミ箱へ捨てる。

袋を拾い、灰皿をしまう。

知花子からライターを取り上げ袋へ入れる。

浩三 ちったあ休め。疲れてるんだよ。ずっと休んでねえじゃねえか。

浩三、袋を持って台所に行く。

知花子、ただ座っている。

浩三、梅干しの箱を持って戻ってくる。

浩三（梅干しの箱を差し出して）ほら。

知花子 知らない。

浩三 こういう時こそミネラルが効くのよ。な、一粒。

知花子 いらないうってば。

浩三 いいか、敵を見誤ったらいけねえぞ。

知花子 敵？

浩三 人間疲れるとろくなこと考えねえ。ガキの頃、親父が言ってた。戦地でよ、怪我した兵隊の怒りは誰に向けられると思う？ 救護兵だ。手前を撃った相手でも、戦地に送り込んだ上官でもなく、救いに来た救護兵に向けられるんだ。

知花子 私には敵が見えてないって言いたいのか？

浩三 お前だけじゃねえ。敵の姿はよう、そう簡単には見えねえのよ。だけど、あの震災はぼろぼろになったこの国のシステムをあぶり出したからよう。もう少しの辛抱だ。敵の姿も見えてくる。

知花子 嘘だ。そんなもん、どうやったら見えるのか？

浩三 そう焦るな。梅干しでも食って、とりあえず落ち着けて。

知花子 ねえ、教えてよ。敵って誰？ 店長？ 猿みたいなパート連中？ 昔の男？ 出世した同級

生？ 幸せな家庭を築いた後輩？ 金持ちになった日本人？

浩三 わかった、わかったから。（梅干しを差し出して）ほら。

知花子 うるさい！

知花子、梅干しの箱を手で払う。

梅干しの箱が床に落ち、梅干しが飛び散る。

知花子 みんな、敵だよ。

浩三 ……。

知花子 父さんも。

浩三、ゆっくりと散らばった梅干しを拾う。

知花子 どうして遺骨なんか受け取っちゃったんだろう。

浩三 ……。

知花子 子供の頃、父親の仕事は建設業だって言えって母さんに言われてた。山谷とか日雇いとか絶対言うなって。

浩三、梅干しを箱に戻していく。

知花子 私と二人きりになってから、母さんは父親の話はしなくなった。だけど、進路のことで喧嘩になると父さんのこと罵って、最後に呟くの、あの人みたいになるよって。暗い台所で鍋にこびり付いた焦げかすをこすり落としながら。あんたはあの人みたいになるよって。

雨脚が強くなる。

知花子 そっちで生活保護の申請した時、役所から母さんのところに確認の電話が行ったでしょ。そ

ちらで面倒見られませんかって。

浩三 ……。

知花子 母さん怯えてた。ある日父さんがやってきて、今の生活全部ぶち壊されるんじゃないかって。病院のベッドで何度も気をつけろって言った。お前の手に負える相手じゃない。騙されるなって。

浩三 ……。

知花子 なのにどうして受け取っちゃったんだろう。受け取りませんって言うつもりだったのに。遺骨差し出されて、つい受け取っちゃった。

浩三 お前は変えたかったんだ、何かを。だから。

知花子 私、見に行ったの、山谷。

浩三 ……。

知花子 雨が降ってて、すごく寒かった。

浩三 ……いつ？

知花子 五年前。母さんが死んで、一人になって。

浩三 見たのか、俺を。

知花子 大きなドヤの前まで行ったらちようど人が亡くなったところで、人だかりが出来てて。私思わず亡くなった人の名前確認した。父さんかと思った。

浩三 ……。

知花子 遺体、酷い臭いだった。見物してたおじさんが言ってたよ。生活保護なんてもらったところで、ドヤじゃ誰が面倒見てくれるわけでもないし、ホームヘルパーなんてとんでもない。ケースワーカーもこない。動けないから垂れ流し、びしょびしょの布団に寝かされて、何を保護されてるんだかわからない。ああはなりたくないって。

浩三 俺はまだ働けた。そんなじじいと一緒にすんな。

知花子 私、見たよ。父さんのこと。

浩三 ……。

知花子 その日の帰り。常磐線のホームで。

浩三 ……。

知花子 ゴミ箱、漁ってたね。

浩三 ……。

知花子 ゴミ箱に頭突っ込んで、ひとつひとつゴミ物色して。

浩三 食べ物漁ってたんじゃないねえ。売れるものを探してたんだ。それが俺の商売だ。一日で二千元稼ぐこともある。

知花子 わかっている。雑誌拾って生活してたんでしょ。

浩三 バタヤだ。立派な商売だ。

知花子 わかっている、けど、あの姿がずっと頭から離れなかった。駅や公園でゴミ箱漁ってる人がみんな父さんに見えて。母さんの声がわんわんするの。あんたはあの人みたいになるよって、気をつけろ、騙されるなって。

浩三 俺はお前を助けようと思って。

知花子 父さんに何が出来るの？

浩三 なんだって出来る。話も聞けるし、歌だって歌える。

知花子 生活保護受けてやっと生きてたくせに。

浩三 それでも出来ることはいくらだって。

知花子 お酒飲むしか能がないくせに。アル中で入退院繰り返し、挙句の果てに道端でのたれ死んだくせに。

浩三 わかった。もういい。

知花子 その姿のどこに希望を感じれば良いの？

浩三 やめる。

知花子 哀れな姿晒さないでよ。

浩三 ……。

知花子 ……父さんみたいに、なりたくないの。

長い間。

浩三、静かに立ち上がる。

知花子 ごめん、私。

浩三、部屋を出て行く。

知花子 ……父さん。

知花子、追いかけて外に出る。

戻ってきて座る。

雨の音だけが響く。

知花子、浩三が拾い残した梅干しを拾う。

暗転

第四場 月曜日の夜

翌日の夜。

月明かりが差し込んでいる。

暗がりの中、ジャージ姿の知花子がぼつんと座っている。

傍らには梅干しの箱が置かれている。

床に投げ出された携帯電話を手に取り、着信を確認する。

携帯電話を再び投げ出す。

知花子、動かない。

窓ガラスにコツリと何かが当たる。

知花子、びくっと窓ガラスの方を見る。

再度、窓ガラスにコツリと何かが当たる。

知花子 父さん？

返事はなく、辺りは静まりかえっている。

知花子、立ち上がり、恐る恐る窓に近づく。

思い切って窓を開ける。

外を確認する。窓を閉める。

戻って、座る。

窓ガラスにコツリと何かが当たる。

知花子、立ち上がる。

その瞬間、窓ガラスが音を立てて割れる。

知花子、叫ぶ。

室内には、外から投げ込まれた石がひとつ転がっている。

知花子、部屋の隅で固まっている。
恐怖で動けない。

押入れの扉が急に開き、浩三が現れる。
知花子、再び叫ぶ。

浩三 知花子。

浩三、知花子に近づく。

知花子 来ないでよ。

浩三 大丈夫か？

知花子 もう、やだ、殺される。

浩三 落ち着けて。殺されやしねえから。

知花子 だってこれ脅しだよ。辞めないと殺すって、そういうことだよ。

浩三 そんなわけねえだろ。

知花子 じゃあ、誰がこんなことするの？ 店から何回も電話掛かってきてたのに、急に電話鳴らなくなった。もう見放されたんだよ。

浩三 みんな帰ったんだろ、営業時間過ぎたから。

知花子 だって。

浩三 わかった。見てくるから。

浩三、玄関から出て行く。

知花子、部屋を見回す。

知花子 待って。

知花子、父の後を追って、飛び出していく。
割れた窓ガラスから風が吹き込んでいる。

車が行き交う音が聞こえる。

玄関のドアが遠慮がちに開く。

男が中の様子を窺い、恐る恐る入ってくる。

太郎である。

太郎は片足が悪く、青いキャップを被っている。

室内で割れたガラスを見つける。

太郎 ああ……

ガラスを片付けようとする。

しかし、どう手を出してよいかわからずおろおろする。

太郎 あーあーあー。

焼酎が目に入る。

太郎 浩ちゃん。

焼酎を手を取って確かめ、部屋を見回す。
焼酎を大切そうにちゃぶ台に置く。

太郎 浩ちゃん、浩ちゃんよう、いるのか？ おーい。

敷きっぱなしになった布団の中を探す。

押入れを開ける。

中に浩三がいる。

太郎、押入れの中を見回す。

浩三の姿は太郎には見えない。

浩三 やっぱりお前か。

浩三の声も太郎には聞こえない。

太郎 ……いねえか。

太郎、座り、焼酎に向かって手を合わせる。

浩三、太郎を見ている。

太郎、ポケットから百円玉を三枚出し、供える。

太郎 やるよ、浩ちゃんに。

浩三 なんだそれ。

太郎 隣のベッドで死んだじいさんがへそくりしてやがったんだ。良くなったらタイに行って女買うって言うてよう。

浩三 変なもん持ち込むんじゃねえよ。

太郎 俺よう、あの日のことあんまり覚えてねえんだよ。

浩三 覚えとく必要がねえから忘れたんだろ。

太郎 いろは会のところであんな。キムさんは俺が浩ちゃんのこと殴ったって言うんだよ。そうなのかな。

浩三 やってねえんだろ、覚えてねえなら。

太郎 そう言われと殴ったかもしれねえんだけどよ。そのまま飲んだくれて、気が付いたら病院にいて、なんも覚えてねえんだよ。

浩三 早く帰れよ。知花子が帰ってくるだろうが。

太郎 なあ、浩ちゃん聞いてるか。

浩三 聞いてるよ。

太郎 あんた本当に死んじゃったのか。

浩三 ……。

知花子が帰ってくる。

知花子 （和室に入りながら）帰ってたの？

知花子と太郎、鉢合わせる。

知花子、和室の入り口で凍り付く。

知花子 誰？

太郎、慌てて窓の方に逃げる。

浩三 太郎！

太郎（ガラスを踏んで）痛え！

浩三 何やってんだ、こっちこい。

太郎 そそそそっちが悪いんだぞ。な、何度も電話したのによ、着信拒否しししやがって。おおおれを馬鹿にしやがって。

浩三 太郎、落ち着け。

知花子 ……太郎、さん。

太郎、窓を開けて、そこから飛び降りようとする。

浩三 ああ！

知花子 危ない。

太郎 うううるせえ。

浩三 こっちにこい、危ないから。

知花子 なんで…。

太郎 わわわ割る気なんか、ななななんで割れたのか。

知花子 太郎さんですよね？

太郎 おおお俺じゃねえ、俺が割ったんじゃねえ。

知花子 何か知ってることがあるんですか？

浩三 余計なこと聞くんじゃねえ。

知花子（浩三に）黙ってて。

太郎 ごめんなさい。

知花子 違うの。あなたに言ったんじゃない。友達なんですよね。父と最後に飲んでた。

太郎 あんた、誰だ？

知花子 娘です。

太郎 う嘘だ。

知花子 嘘じゃありません。

太郎 娘がいるなんて聞いたことねえ。

知花子 あなたのこと知ってます。

浩三 黙れ。しゃべるな

知花子 父と同郷だって。トキワ屋、知ってますよね。

太郎 トキワ屋…。

浩三 やめろ。（太郎に）早く帰れ。なんで聞こえねえんだよ。

知花子、梅干しの箱を見る。

知花子 あなたが食べさせてくれるの楽しみにしてたって。

太郎、箱を拾い、じっと見る。

浩三（太郎に）早く帰ってきてくれ。頼む。

太郎 浩ちゃんは。

知花子 はい。

太郎 どうして。

知花子 道で倒れてたって。

浩三 やめる、話すな。

知花子 声かけたらまだ意識があって、すぐ吐いたそうです。飲み過ぎたのかと思ってドヤに運んで、寝たと思ったら死んでたって。

浩三 もういい、やめてくれ。

太郎 トキワ屋……。

知花子 教えてください。知ってることを。

浩三 いいんだ、忘れて。思い出さなくていい。

太郎 ぼた山で石炭くず拾って持ってくとよ、監督のおっちゃんが弁当の蓋に白いメシと赤い梅干しわけてくれたんだ。その度に 坊主、これはトキワ屋のだからな。」って念を押されてよ。

太郎、蓋を開け、梅干しを食べる。

知花子、反射的にとめようとする。

太郎、ふいに視線をあげ、知花子を見る。

太郎 笑いやがったな。

知花子 え？

太郎 いま笑いやがったろう。え？

浩三 笑ってねえ。誰も笑ってねえぞ。

太郎 嘘だと思ってるんだろう。本当は食ったことなんかなくて、偽物だって気が付かずに美味い美味いって食うと思ってるやがるんだ。

太郎、知花子に近づく。

知花子、思わず後ずさりする。

太郎（梅干しの箱を投げ捨て）これはトキワ屋じゃねえ。

知花子 トキワ屋のだから、私……。

太郎 馬鹿にしやがって。試そうたって無駄だ。

浩三 試そうと思っただけじゃえんだ。ちょっとした冗談のつもりだった。お前があんまり愚痴るか
らよ。

知花子 試した……。

太郎 黙って食うと思ったら大間違いだ。馬鹿にすんな

浩三 悪かった。俺が悪かった。

太郎 コケにしやがって。

知花子 あなたが……。

太郎 俺が殺した。殴り殺してやった。

太郎、知花子に近づいていく。

浩三 知花子、逃げる。

知花子 来るな……。

太郎、知花子に手を伸ばす。

知花子、太郎の悪い方の足を蹴り飛ばす。

太郎、倒れる。

浩三 太郎！

知花子、太郎に馬乗りになり、側にあつた鞆で太郎を殴る。

浩三 やめろ、知花子。

知花子 ……人殺し。人殺し。

浩三 やめてくれ。

知花子、殴り続ける。

知花子 お前なんか道路の端っこで干からびてればいいんだ。人殺し。

浩三 俺を殴れ。俺が悪いんだ。やめてくれ。死んじまう。

知花子、ポケットからライターを取り出す。

ライターの火をつける。

知花子 殺せるもんなら殺してみろ。殺される前に殺してやる。殺してやる。

浩三 知花子。

知花子、太郎に火をつけようとする。

この世の全てを焼き尽くそうとするように。

知花子 死ね。

浩三、大声で常磐炭坑節を歌い始める。

浩三 はあーああ

知花子、呆気にとられて浩三を見る。

浩三 朝も早よからカンテラ下げて

坑内通いも 主のため

遠くはなれて遭いたい時は

月が鏡に なればよい

知花子が持つライターの火が消える。

太郎、知花子を突き飛ばす。

浩三 あ。

太郎、玄関から逃走する。

知花子、上体を起こす。

太郎を追う為に立ち上がるうとする。

浩三 おらが炭鉱で見せたいものは
男純情と 良い女

知花子 なんなの……

浩三、歌い、踊る。

浩三 遭えばさほどの話もないが
遭わなきゃその日が 過ぎされぬ
おらが炭鉱に一度はござれ
義理と人情の 花が咲く
この炭坑の姐さん被り
指に輝く 黒ダイヤ
可愛いあの娘の指見ておくれ
指に輝く 黒ダイヤ

知花子 なんなのよ。

浩三 ちくしょう。ふざけんじゃねえ。

知花子 なが。

浩三 おかしいじゃねえか。ガキの頃からくず拾って、炭鉱に入ってたあいつがよ、先山に憧れてたあいつがよ。石炭はもう出ねえ、次は石油だ、いや今度は原子力だって振り回されてよ。もうちょっといい目見たっていいじゃねえか。なのに、なんで俺みてえな馬鹿の為に……。

知花子 わかったから、もういいよ。もうやめて。

浩三、窓を開ける。

外に向かってひときわ大きな声で歌い始める。

浩三 豎坑三千尺下れば地獄

回る車は 右左

知花子 やめてよ……

浩三 豎坑三千尺下れば地獄

死ねば廃抗の 土となる

娘可愛いや選鉱場の陰で

月を眺めて 涙拭く

浩三、外に太郎の姿を見つめる。

浩三 太郎。

知花子、窓の外を見る。

浩三 生きてやがったか。こんちくしょう！

知花子 ……太郎さん。

浩三 いいか太郎、汚ねえのはお前じゃねえからな。

残る切端が 金となる
だみね山から飛んでくるカラス
金もないのに カオカオと

浩三、外で歌い続ける太郎を見つめ。

浩三 あいつ知らねえサラリーマンと喧嘩してたんだよ。仕事選んでねえで原発行けって言われたんだと。飯場から逃げてきたばっかだっつうのにな。笑っちゃまうだろ。

知花子 仙台の飯場に入ってたって。

浩三 防護服着て、意味のねえ除染作業よ。それでもあいつ喜んでたよ。久しぶりの仕事だっつうよ。働けばどここの飯場が酷くてよ、デズラが宿代超えないように仕事の量を調整するらしいのよ。働けば働くほど、ちよっとずつ借金が増えてく仕組みよ。結局逃げ帰って来たんだけど、それまで働いた金はふいにするし、探しに来たヤー公には殴られるし、もうぼろぼろだよ。

知花子 だから、根元さんにお金借りて、焼酎買って。

浩三 あいつよ、いつもみてえにあの町をけなしてた。廃れきった商店街のやる気のなさとか、レジヤー施設のセンスの悪さとか。いつも一緒に盛り上がってたんだけどよ。笑えねえのよ。だっつうよ、拾った週刊誌に載ってたあの町の光景は、そんなこと言ってるような状況じゃなかったからよ。人っ子一人いなくてよ、餓死した牛を豚が食ってたんだぞ。この先何十年かけてもなくならねえ毒がばらまかれたのに、そんなもんやる気だのセンスだので乗り切れるわけねえじゃねえか。どうしろってんだよ、ちくしょう。この馬鹿が、なんにもわかってねえくせにべらべら文句並べやがって。それじゃ、俺たち食いものにしてる奴らと変らねえじゃねえか。そう思ったら、なんかむかついてきてよ、ちったあ思い知れて、そう思って、トキワ屋のだって嘘ついて、ただの梅干し食わせて。

知花子 ……父さん。

浩三 酷えもんだよなあ。俺の故郷が汚染されていくのによ、俺がやったことと言やあ、あいつを人殺しにただけだなんて。

長い間。

知花子 ……何言ってるの。それだけなわけないじゃない。

外からパトカーのサイレンが聞こえてくる。

浩三、窓から外を見る。

浩三 太郎。落ち着け、大丈夫だからな。

知花子も外を見る。

知花子 (太郎に) 待って、太郎さん、聞いて。

浩三 知花子。

知花子 (太郎に) 私ね、休憩室のテレビで黒い塊に飲み込まれる町を見た時、死にたいとか言ってる場合じゃないと思った。みんなでこの国を支えなくちゃって。なのに、なんでだろう、この辺がむかむかするの。全部ぶっ壊れたって関係ないって。待って。行かないで!

浩三 ……

知花子 (太郎に) あなたもそうだったんだよね。ねえ、そうでしょ。私考えるから。あれはどういうことだったのか。だから。

パトカーの音が止まる。

知花子 見てくる。

知花子、室内に戻り、上着を掴む。

浩三 大丈夫か？

知花子 父さん。

浩三 ……。

知花子 行ってきます。

知花子、部屋を出て行く。

浩三、知花子を見送る。

暗転

第五場 火曜日の朝

外が白んできた。

部屋は片付いて、窓ガラスは間に合わせの修繕が施されている。ちゃぶ台の上には焼酎が置かれている。

浩三がガムテープ片手に、床に顔を近づけている。

窓ガラスが割れた破片を探しているのである。

浩三、床の上に小さく光るガラスの破片を見つける。

ガムテープを少し取って、破片を回収する。

回収した破片を満足そうに眺める。

知花子が帰ってきた。

浩三 (破片をゴミ箱に捨て) お帰り。

知花子 ただいま。

浩三、再び床を凝視する。

知花子 何してんの？

浩三 破片がな。

知花子 (和室に入り) 片付けてくれたんだ。

浩三 気をつけるよ。後で掃除機掛ねえと。

知花子 充分綺麗に見えるけど。

浩三、破片を見つけ、ガムテープで回収する。

浩三 ほらな。

知花子 わかった。明るくなったら掛けるから。

浩三 仕事は？

知花子 今日は休む。夕方にまた警察来てくれて言われてるし。

浩三 大丈夫なのか。

知花子 明日と代ってもらおうから、とにかく寝ないと。

浩三 一杯飲むか。

知花子 ええ？

浩三 ビール冷えてるから。(と、台所へ行く。)

知花子 でも冷蔵庫。

知花子、上着を脱ぎ、ハンガーに掛ける。

浩三、ビールを一缶持って来て、知花子に差し出す。

知花子 (ビールを受け取り) 冷えてる。

浩三 な。

知花子 (へえ。(と、ビールの蓋を開ける。))

浩三 (グラスに焼酎を注ぎ) 乾杯。

知花子 (乾杯してから一口飲んで) 生き返るもんだね。

知花子、もう一口ビールを飲む。

知花子 太郎さん、引取ってくれる病院見つかったら連絡くれるって。

浩三 そうか。

知花子 後で根元さんにも連絡してみる。

浩三 うん。

知花子 太郎さん、ずっとあの歌歌ってたよ。そしたら、刑事さんの一人が声かけて来てね。俺も同郷だって。そいつが入れる病院探してやるからって。

浩三 (破片を見つけ) あ。

知花子 え。

浩三 (破片を回収し、) またあった、ほら。

浩三、破片をゴミ箱に捨てる。

知花子 太郎さんが言うの。

浩三 ……。

知花子 俺はいつから加害者になっちゃったんだろうって。

長い間。

浩三 覚えてるか？

知花子 なにを。

浩三 川崎にいた頃のこと。

知花子 よくパン持ってきてくれたよね。

浩三 あんなのただの売れ残りだ。

知花子 おいしかったよ。カニパン。

浩三 ケチな工場だったけど、パンだけは食い放題だったから。

知花子 あの会社まだあるの？

浩三 さあな。怪我して辞めてから行ってねえから。

知花子 ……

浩三 あの時お前いくつだったんだ。

知花子 四つ。

浩三 そうだ四つだ。乳歯が抜けたまんま永久歯がなかなか生えなくてよう、空気が歯茎から漏れちゃうから、上手くだぢづでどが言えねえんだ。仕事が決まらなくて、家でふて寝してる俺に向かって、回らねえ口で言いやがる。どこで覚えてきたんだか、あたしたち、ころも（子供）はねえ。」
あたしたち、ころもはねえ。」あたしたち、ころもはねえ。」。なんでもかんでも事あることに言うんだ。あたしたち、ころもはねえ。」。食わしてもらうのが当たり前みてえな面しやがって。なんでこんなガキの面倒見なきゃなんねえんだよ。こんなもん背負ってたら俺はこの世の中から取り残されちゃう。世の中、所得倍増、高度経済成長で昇り調子だったのによ。冗談じゃねえ。：

知花子 ……

浩三 すまなかった！

知花子 ……

浩三 お前にとんでもねえ未来を残しちゃった。

間。

知花子 でもそれは、変らない宿命じゃない。

浩三 え？

知花子 だから、私、父さんの骨を受け取ったんだ。

浩三 知花子。

知花子 大丈夫。

浩三 ……

知花子 私はまだ生きてるから。

日が昇る。

朝日が部屋に差し込み、二人を包む。

浩三がゆっくりと立ち上がる。

浩三 イカ人參食うか、イカ人參。

知花子 父さん。

浩三 なんだ。

知花子 またお墓行くよ。今度休みになったら。

浩三 ああ、そうだな。

浩三、微笑んで、ゆっくりと奥へ消える。

知花子、それを見送る。

知花子 父さん。ありがとう。

暖かい日差しが知花子を包む。

知花子、ビールを飲み干す。

知花子にだけ聞こえる声が常磐炭坑節を歌っている。

溶暗

(第六稿 二〇一二年九月十五日)

幕

参考文献

- やられたらやりかえせ 実録 釜ヶ崎・山谷解放闘争」(田畑書店)
山谷曼茶羅」(大修館)宮下忠子著
思川」(筑摩書房)宮下忠子著
東京女性ホームレス物語 赤いコートの女」(明石書店)宮下忠子著
山谷ブルース 寄せ場」の文化人類学」(洋泉社)エドワード・ファウラー著
釜ヶ崎のススメ」(洛北出版)原口剛・稲田七海・白波瀬達也・平川隆啓 著
風の自叙伝 横浜・寿町の日雇労働者たち」(新宿書房)野本三吉著
貧困社会 ニッポンへ釜ヶ崎からの発信」(アットワークス)
貧困の現場」(毎日新聞社)東海林智著
いま、連帯をもとめて」(大月書店)鎌田慧著
貧困のリアル」(飛鳥新社)稲葉剛・富樫匡孝著
若者を見殺しにする国」(双風舎)赤木智弘著
追われゆく抗夫たち」(岩波新書)上野英信著
下キュメント出稼ぎ」(現代教養文庫)野添憲治著
ものいわぬ農民」(岩波新書)大牟羅良著
どはどぶろくのど 失われた酒を訪ねて」(講談社)本郷明美著
社会を変えるには」(講談社現代新書)小熊英二著